様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２１ 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2023
課題番号：１６Ｋ０２９９８

研究課題名（和文）「インド独立運動における超領域的諸相―「完全自治」の探求と日本―」

研究課題名（英文）Transnational Aspects of the Indian Independence Movement: The Pursuit of 'Purna Swaraj' and Japan

研究代表者
Ｂｈａｔｔｅ　Ｐａｌｌａｖｉ（Bhatte, Pallavi）

京都大学・人間・環境学研究科・講師

研究者番号：３０７６１３６６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、ディアスポラ・トランスナショナリズムの枠組みを用いて、20世紀前半期を通じて実施されたインド独立運動の超領域的諸相を多面的に解明することを目指し、とくに日本における運動の実態に焦点を当てた。国内外所蔵の諸言語史資料の分析からは、インド人およびインド系の運動家たちの来日後の活動内容、日本内外における人的交流の範囲とそのコンテクスト、彼らの思想、専門的職業、独立運動における地位や役割、来日前後の他地域における活動との関連が明らかになった。さらに独立運動に関する日本・インド・イギリス各地の記念館や史蹟を訪問し、証言収集にも努め、運動に対する歴史認識や記念顕彰の現状を確認することもできた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究では、インド独立運動に関する諸史料の分析のほか、そこには記載されないオーラル・ヒストリーや記念顕彰の問題も検討し、「記憶」の伝承に迫ることにも注力した。以上をもって、インド独立運動の超領域的な諸相を多面的に明らかにしたことが、本研究の意義である。
さらに、諸帝国の植民地間の人的交流や脱植民地化の相互関係を解明した事例研究としての意義もある。また、多様なディアスポラの交錯する関係を具体的な「場」からとらえる方法を示すことで、グローバル・ヒストリーや世界史の理解の深化に資するとともに、日本史・アジア史・西洋史を有機的につなぐ新たな学際的研究の手法を提示したことも、本研究の意義と考える。

研究成果の概要（英文）：This study aims to clarify the global aspect of the Indian independence movement that developed during the first half of the 20th century, utilizing the frameworks of diaspora and transnationalism. It emphasized the movement's progression in Japan. The examination of multilingual historical materials in Japan and other countries revealed the activities of Indian revolutionaries since their arrival in Japan, as well as the extent and circumstances of human interactions both within and outside of Japan. Additionally, their beliefs, professions, and involvement in the freedom struggle, as well as their activities in Japan and other regions, were disclosed. Furthermore, I verified the current condition of the historical consciousness of the movement and its memory, legacy, and commemoration by conducting visits to relevant memorials and historical sites in various locations throughout Japan, India, and the United Kingdom, as well as collecting testimonies.

研究分野：インド独立運動のグローバル・ヒストリー

キーワード：インド独立運動史　英領インド　印日関係史・交流史　人的ネットワーク　汎アジア主義　トランスナショナル　ディアスポラ　記念・顕彰

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景
本研究では、1905 年から 1947 年（完全自治“ Purna Swaraj ”達成の年）の時期に日本で展開した運動の実態を解明し、それと同時期に世界各地で展開した運動との関係を明らかにする。研究対象の時期の起点を 1905 年に定める理由は、この年がインド独立運動史上、決定的に重要な意味を持つことによる。
研究史を振り返ると、トランスナショナルに移動した独立運動家の来日意図、日本におけるプロパガンダの内容とその日本内外における反響、人的ネットワークと支援獲得ルートとの関連等について充分に解き明かされていない、という課題が認められる。そこで本研究では、これらの未解明の諸問題を追究し、日本における運動がインド独立運動全体において如何なる意味を持ったのかを考察する。

２．研究の目的
本研究の目的は、ディアスポラ・トランスナショナリズムの枠組みを用いて、1905 年から 1947 年に至るインド独立運動と日本との関わりを捉え、地球規模で展開されたインド独立運動全体における日本の位置づけを考察することにある。それを通じて、インド独立運動の重層性と多面性、地球規模の連繋と軌跡の重要な一側面を明らかにすることが最終的な目標である。

３．研究の方法
次の 3 点を具体的な検討課題とし、そのための日本国内外所在のアーカイブ史料および刊行史料の調査、フィールドワーク（史蹟、博物館、記念館、記念顕彰碑の調査および聞き取り調査）を実施する。
（１）インド人およびインド系活動家の思想、専門的活動における業績、日本以外の地域で実施した独立運動に関わる諸活動の解明。
（２）インド人およびインド系活動家の来日背景・意図、日本における活動実態の解明、インド本国および 海外拠点のネットワークとその形成過程の方法と特質、世界的な独立運動における日本滞在の意義の考察。
（３）英語およびインド諸語で出版・配布された活動パンフレットの収集と分析。

４．研究成果
2016 年度は、インドを訪問し、ガダル運動関係一次史料の収集と各機関における史料所蔵状況の確認、実地踏査、インド国内の研究状況の把握を主たる課題とした。訪問した機関は下記の通り。スワタントリヤ・ヴィール・サヴァルカル記念館、ムンバイ・アジア協会、インド国立公文書館、ネルー記念博物館・図書館、ジャリアンワーラー公園、アムリトサル虐殺事件史蹟・慰霊碑を訪問した。この結果、現地発行（日本国内では入手不可）の研究文献を入手し、第一次世界大戦期のインド独立運動とヨーロッパ・アジア諸国との関わり、特に人的交流と思想交流、世界各地におけるパンジャーブ・ディアスポラの活動状況の様相やインド本国に対する意識についての新しい理解を得た。独立運動に関する記念館や史蹟を訪問したことで、運動家に対する現地社会の認識や記念・顕彰の現状を確認することができた。
さらにパンジャブ州ルディアナでの史料調査において、ガダル運動を主専攻とする研究者３名および学術出版関係者と学術交流の機会を持つことができた。

2017 年度は、イギリス（ロンドン）における第一次・第二次世界大戦期のインド独立運動家関係一次史料の調査・収集と昨年度の研究成果の公開を課題とした。史料収集のために訪問した機関は下記の通り。大英図書館、国立公文書館、ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス、オックスフォード大学図書館。この調査において、インド独立運動家に対するイギリス情報組織の活動実態、INA・日本協力関係の構築などに関する史料を閲覧し、一部を収集した。研究成果の公開の面では、リスボン新大学にて開催のヨーロッパ日本研究国際会議において、昨年に初公開された機密解除文書の分析結果とともに「大東亜戦争」と英領インド関係に関する新しい研究視角について提示した。
また京都大学にて開催の国際シンポジウム「第二次世界大戦におけるアフリカ・アジア植民地の動員-兵士・労働者・女性-」においては、戦争証言における INA のメモリーをテーマに報告した。
さらに、インパール戦跡踏査や東北インド・日本交流事業にも参加し、日印関係史研究の深化に向けた提案について共同報告を実施した。これらは本科研外の活動ではあるが、印日双方の研究交流を通じて得られた成果は次年度以降の本科研の研究・調査にも活用できる有益なものであった。

2018 年度には(1)これまで重点的に文献所蔵調査で取集してきた資料を引き続き処理および分

析を実行した。(2)20 世紀初頭欧米の移民コミュニティーとインド民族運動の調査範囲を広げ、日本側史料の調査・取集と分析に取り組んだ。次に(3)重要となる国内所在史料の収集のため、国立公文書館その他関係機関に所蔵されている史料の調査を遂行した。
またインパール作戦関係の国内聞き取り調査を行い、大切な遺品として残された（新聞または雑誌の切り抜かれた抜粋などを含む）個人コレクションを収集し、「下」あるいは「辺境」からの歴史探求に裨益する資料群を得た。さらに、両大戦期の日本側の刊本を購入し、そこでの記載内容の整理に力を注いだ。

2019 年度は、(1)国際会議におけるこれまでの研究成果の公開、(2)海外調査としてインドにおける史・資料収集、(3)国内調査として関西・関東地方におけるフィールドワーク、(4)戦前期より発行が続いている機関誌を通じた研究成果の発信、以上の 4 点に努めた。
(1)については、前年度以前・以降で収集した史料の分析結果をもとに、第３回日本研究ヨーロッパ協会（EAJS）日本会議において、大正期東京におけるインド人ディアスポラに対する帝国日本の公的権力によるインテリジェンスの実態と背景を報告した。(2)については、ムンバイ所在のアジア協会や聖ピウス 10 世カレッジ図書館などで研究テーマに関わる文献調査をおこなった。(3)に関しては、関西・関東地方の各地におけるインド独立運動史関係の史跡・記念碑などの実地踏査をした。(4)以上の研究成果の一部を『月刊インド』の最新号に投稿し、掲載した。
以上を通じて、大正期の日本でインド独立運動に関わったインド人・インド系ディアスポラの政治運動のみならず、教育・商業活動、さらには彼らの日本人や欧米人との関係を明らかにすることができた。

2020・2021 年度には、前年度の後期に国際会議での口頭発表の成果を踏まえ、それを発展させる調査を行い、並行して成果論文の刊行に向けた準備を進めた。研究推進のために必要不可欠な海外調査、国際会議や学会での公開を予定していたが、新型コロナウイルスの影響で殆どが中止や延期になり予定通りいかなかった。その代わりに、多くの二次文献をもとに研究を進め、貴重な大正時代の手稿史料の翻刻・翻訳者に力を注いだ。以上に加えて、関東地方（東京都内、茨城県、栃木県）を中心にフィルドワークを行なった。その成果の一つとして、大正時代における印日知識人層のネットワークとインド独立運動との関わりの重要な一側面を確認できた。

2022 年度も過去 2 年の研究内容を継続し、収集済みの一次史料、既刊史料、基本文献の精読を実施した。これまでベースライン調査だけで明らかになった知見も数多くあり、その後、新たな公文書群の所蔵調査を進めた。以上を通じて、大正期・昭和初期における印日知識人・芸術家のネットワークとインド独立運動との関わりがより明瞭になった。また史跡・記念・記憶について調査を深めていくうちに、当時の人や書物をめぐってどのようなネットワークが形成されていたのかも部分的に判明した。

2023 年度は、まず国内で国立国会図書館での史料調査・収集を実施し、続いて海外調査はインドでの史料調査を進めた。マハーラーシュトラ州では、パールガル郡の都市ヴァサイー（旧バセイン）、ムンバイ市内の K・R・カマ東洋研究所、ムンバイ・アジア協会（旧ボンベイ・アジア協会）を訪問し、史料調査、情報収集、学術交流を実施した。続いてニューデリーにおいては、インド国立公文書館(NAI)、ジャワハルラール・ネルー大学(JNU)、首相博物館と図書館協会(PMML)で史料調査をおこない、学界未活用の史料群を多数収集することができた。さらにゴア州にも足を運び、聖フランシスコ・ザビエル歴史研究センター、ゴア州立公文書館、その他の民営のミュージアムや記念館で史料調査を実施し、現地研究者との学術交流と情報交換、フィールドワークもおこなった。
以上の取り組みを踏まえつつ、二次文献の精読と、収集済みの一次史料の翻刻・整理・分析作業を継続し、そこで得られた新たな知見を取り入れた論考（計２本）の執筆にも着手した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 バッテ・パッラヴィ	４．巻 2020年4月-5月合併号
２．論文標題 大正10年、日印交流史の一齣　―謎の亡命者を追って―	５．発行年 2020年
３．雑誌名 月刊インド	６．最初と最後の頁 13-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　0件／うち国際学会　4件）

１．発表者名 Pallavi Bhatte
２．発表標題 Diasporic Indians and Surveillance Imperial Japaneses authority in Taisho Japan
３．学会等名 第３回日本研究ヨーロッパ協会（EAJS）日本会議（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Bhatte Pallavi
２．発表標題 A Historical Examination of the Greater East Asia War and British India
３．学会等名 15th International Conference of European Association of Japanese Studies（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Bhatte Pallavi
２．発表標題 Testimonies and the Second World War: Reflections on How Japanese Soldiers ‘Remember’the Indian National Army
３．学会等名 International Conference on Colonial Mobilization in Africa and Asia during the Second World War（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Rohan D’Souza and Pallavi Bhatte
２．発表標題 Re-imagining the North East in India: Did Geography Sidestep History in Vision (2020) ?
３．学会等名 North-East India & Japan Cultural Symposium（国際学会）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関